

ハノイ医科大学と第4回ワークショップ
「COVID-19 流行下における PrEP の継続」開催
(2022年4月27日)

プロジェクトの重要なパートナーであるハノイ医科大学とは、若手を中心とした研究者との研究活動の紹介・共有を定期的実施しています ([第一回ワークショップについてはこちら](#)、[第二回ワークショップについてはこちら](#)、そして[第三回ワークショップについてはこちら](#))。今回は約一年前に行った第1回テーマをフォローアップする意味も踏まえ、新型コロナウイルス感染症発生後3年目となる今、「COVID-19 流行下における PrEP の継続」をテーマに開催した第4回目のワークショップには、日本とベトナムから25名が参加しました。

はじめに、ベトナム・ハノイ医科大学 Mai Quang Anh 研究員 (右写真) が「ベトナム COVID-19 アウトブレイク下における Sexual Promotion Clinic (SHP) での PrEP 開始と継続のための革新的な戦略」について発表しました。コロナ禍でのロックダウンや社会的規制などにより、SHP で一時的にオンサイト (病院に受診して) の PrEP 処方が難しくなったことに起因し、今後は自宅若しくはコミュニティにいる希望者へも処方できるよう新たな仕組みが必要である、というものです。

同時に Quang Anh 研究員は、SHP が実施している Tele PrEP¹ と Mobile PrEP² の経過についても報告しました。これらの活動はコロナ禍の現状だけに有効なものではなく、これまでケアが届きにくかった地域へも PrEP 提供が可能となり、HIV 感染リスクの減少につながる非常に有益なものだと述べました。

一方 Tele PrEP の問題点として、HIV 自己検査キットを郵送する過程で、キットの紛失や匿名性に関する不安、不適切な方法での検査と検査結果の信頼性への懸念なども挙げられました。



¹ Tele PrEP : PrEP 薬や HIV 検査キットを自宅へ郵送する活動

² Mobile PrEP : コミュニティで活動する組織と協力し、コミュニティで PrEP 薬や検査、カウンセリング等を提供する活動

次に、国立国際医療研究センター（NCGM）エイズ治療・研究開発センター（ACC）から林田庸総専門家が「郵送による乾燥濾紙血検体を用いた HIV 検査の検証」について発表しました。日本では保健所で HIV 検査を無料で受けることができますが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、保健所での HIV 検査件数は 2020 年以降大幅に減少しています。HIV 検査へのアクセスを改善するため、乾燥濾紙血（Dried Blood Spot、DBS）を用いた郵送 HIV 検査の需要が高まっていることから、林田専門家はその検査方法を検証しました。



自身の研究論文から、郵送での HIV 検査方法に関して発表した林田庸総専門家（NCGM、ACC）

少しコロナ感染状況が落ち着いたハノイ、プロジェクトメンバーは久しぶりにハノイ医科大学に赴いて議論に参加

HIV 感染者 50 名、HIV 非感染者 50 名から得た DBS を用いて Lumipulse で HIV 抗原/抗体を測定した実験では、HIV 感染者 1 名が陰性（感度 98%）、HIV 非感染者全員が陰性（特異度 100%）という結果となりました。DBS は血漿検体を用いた HIV 検査に比べて感度が多少劣るものの、HIV 検査の拡大に有用な選択肢であることが示唆されました³。

2 名の発表を終え今回のワークショップでは、今後もさまざまな事象が発生したとしても利用者が自身の状況に合わせた方法で PrEP を継続して服用できる環境を整えること、Tele PrEP や Mobile PrEP、DBS を用いた郵送 HIV 検査といった多様な選択肢があることは極めて重要であり、それらがコミュニティでの PrEP の拡大や継続率の改善、HIV 治療の発展にもつながると結論付けられました。

³ 参考文献: [Validation of mailed via postal service dried blood spot cards on commercially available HIV testing systems - PubMed \(nih.gov\)](#)



JICA-SATREPS プロジェクト
ベトナムにおける治療成功維持のための“bench-to-bedside system”構築と
新規 HIV-1 感染阻止プロジェクト



With コロナの時代であっても HIV の予防と治療は喫緊の課題です。HIV・エイズに対する多くの支援を「With コロナ」に適応させ、より質の高い医療・診療体制の維持と拡大を目指し、現場では日々模索しながら進化を続けています。